



2017年(平成29年)

1月号(No. 860)

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● [jac-room@jac.or.jp](mailto:jac-room@jac.or.jp)

## 若者たちにチャンスを一ヒマラヤ・キャンプに込めた私の思い

ヒマラヤにあこがれ、挑戦したいと願っている若者たちに向けて、そのための経験を積む場としての受け皿を提供し、ヒマラヤ登山の間口を広げたい、との思いから企画された花谷泰広さん(山岳ガイド)の「ヒマラヤ・キャンプ」。昨春秋、参加した6名の若者たちが、ロールワリンの未踏峰に全員初登頂することができた。

### 花谷泰広

ヒマラヤ・キャンプの目的は、ヒマラヤ登山の間口を広げることである。現在のヒマラヤ登山は二極化している。ある程度経験を積み上げた者たちによる登山か、いわゆるガイド登山隊。この流れを否定しようとは思わない。しかし、以前の大学山岳部のような、経験を積む場としての受け皿が少なくなってしまったことに、私は危機感を抱いている。

私の初めてのヒマラヤ登山は20歳のときだった。所属していた信州大学山岳部のOB組織が、たまたま私が入学した翌年にヒマラヤ登山を計画していたのだ。当時の私は体力には自信があったが、雪山をワンシーズンしか経験していない素人だった。ただ先輩方が与えてくれたチャンスに飛びついただけだった。そして幸運なことに、7035mの未踏峰に初登頂する

## 目次

若者たちにチャンスを一

|                        |    |
|------------------------|----|
| ヒマラヤ・キャンプに込めた私の思い      | 1  |
| 東ネパール・ナンガマ川峰(6029m)初登頂 | 5  |
| 若手メンバーで東稜からマナスル登頂      | 8  |
| さんけん通信                 | 10 |
| 東西南北                   | 11 |
| 活動報告                   | 12 |
| 支部だより                  | 13 |

越後支部／茨城支部

|             |    |
|-------------|----|
| 新入会員        | 15 |
| 図書紹介        | 15 |
| 図書受入報告      | 16 |
| 会務報告        | 17 |
| 会員異動        | 18 |
| ルーム日誌       | 18 |
| INFORMATION | 18 |
| 編集後記        | 19 |

▶日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間  
月・火・木……………10～20時  
水・金……………13～20時  
第2、第4土曜日……………閉室  
第1、第3、第5土曜日……………10～18時

ことができた。そのときの経験がなかったら、確実に今の私はない。そこで今度は私がそのチャンスを作りたいと思い、このプロジェクトを立ち上げた。幸いなことに組織が主体になって登山隊を組まなくても、個人が主体的に目的や理念を決めて公募し、登山隊を組織できる時代になった。そしてやるからには、よくある〇〇周年記念行事などではなく、継続的に取り組むことで人の連鎖を作っていきたく考えた。

目標とする山の選定は、基本的に私自身が行きたい山に、行きたいなと思った仲間と登る、ある意味純粋な登山だ。初登頂、初登攀にこだわりたい。これは私自身がプロジェクトを続けていく上での、大きなモチベーションにもなっ

### ロールワリンの未踏峰へ

「ヒマラヤ・キャンプ2016」は、未踏峰ロールワリン・カン(6664m)に、登山メンバー6名が全員登頂するという、大成功で終えることができた。この山を最初に見たのが2014年だった。一目惚れと言うべきだろうか。いつか必ず登りたいと思った。「ヒマラヤ・キャンプ2015」で

いる。これだけ情報が手に入りやすい世の中で、情報がないということほど贅沢なものはない。以前に比べて装備や情報が発達し、政治的にも行きやすくなっているとはいえず、少しハードルが高い海外登山。しかし、最初の一歩さえ踏み出してしまえば、後は本人の努力次第で必ず未来は開けるものだ。



頂上稜線直下の6500m付近を登攀中の角田隊員(この写真のみ飯田祐一郎撮影。ほかは花谷撮影)

な思いから、今回は「この山に登る！」ということ宣言してメンバーを公募することになった。

この山を確実に登るために、昨年は時間をかけて取り組むことができなかったチーム・ビルディングを、今年は本番まで全部で9回に及ぶ国内合宿やミーティングで養った。事後の報告まで含めると、ヒマラヤ・キャンプは全員が1年かけ

て一つの目標に向かって過す時間となる。

合宿で意識させたことは、「当たり前」のことを、ミスなく確実にこなすことだ。今さら難しい技術を覚えたところで、今回の登山ではほとんど役に立たない。なぜなら、低酸素下で行動する高所登山では、思考能力は確実に落ちる。確

実に身に付いている技術でなければ役に立たない。大切なことは「今持っているクライミング技術」を、より確実にすることだ。合宿では彼らのロープワークなどを観察し、修正すべき点だけ指摘するようにした。新しく学んだ技術は、クレバス・レスキューぐらいではないだろうか。

最もメンバーに求めたことは、歩行技術と生活技術に磨きをかけることである。これらは登山技術の要となる技術だが、とにかく地味だ。しかし、山に入っている時間が長ければ長いほど上達する、ある意味ごまかすことができないものだ。つまりは、ヒマラヤへ行くまでに、しっかりと登り込んでおけということだ。

### 6人全員で初登頂に成功

9月25日にカトマンズ現地集合。3日間でブリーフィングなどの登山準備を整えて、9月29日にカトマンズを離れた。ロールワリン地方は、2015年の地震により大きな被害を受けた地域の一つである。2015年も当初の計画はロールワリンからの入山を計画していたが、断念した経緯がある。日

本の山岳団体からの支援によって復興した学校などを巡りながら、高所順応を意識していつもより少しゆつくり進行させた。シーズン最初で道の状態が悪く、当初の計画よりもずいぶん手前にベースを設営せざるを得なかったが、大きなトラブルもなく10月5日に全員そろってベースキャンプ入りができた。広大なロールワリン氷河のモレーンのど真ん中にポツンと現れたベースは、まるでほかの星のような荒涼とした場所だった。

ベースキャンプの整備とレストを入れて、10月7日より早速偵察を開始した。モレーン帯は複雑な地形を、石積みをしながらルートを決めていくが、途中から芸術的な石積みをするの方がメインになってしまった。

ちょうどバルチャモを登って下山してきた日本チームにも話を聞くことができ、上部の状況をほぼ見定めることができた。この後しばらくは悪天が続くという予報があったが、天気は崩れは少なくてホッとした。例年よりかなり遅れて10月10日ごろにモンスーンが明けたと思われる。

10月11日より3泊4日での高所

順応と偵察に出た。私以外は誰もロールワリン・カンを見たことがない。メンバーがどういった反応を見せるのか、とても楽しみだった。初日は標高5000m付近まで。ベースから標高差300mぐらいだが、初めて泊まると息苦しさを感じる。有名トレッキング・ルートとは思えないルート状況で、途中には際どいクライミングもあった。

2日目もゆつくりとしたペースで上を目指す。ベースの個人差が大きいので、各自のペースで進む。ほとんど人の行き来がないモレーンで、ルート・ファインディングだけでなく、足元の石が崩れないように気を付ける必要があった。2014年に挑もうとして叶わなかったテンギラギタウの西壁を見上げながら、徐々に大きくなるロールワリン・カンに近付いて行った。5550m付近にちょうどいいスペースを見付け、全員で2時間かけてゆつくりと整備し、C1とした。さすがにここまで上ると酸素が薄い。ほとんど眠れない、苦しい夜を過ごした。

3日目の目標は、標高6000mへのタッチだった。ロールワリ

ン・カンの懐に入って行く氷河は、心配していたほど悪い状態ではなく、ほぼ狙っていたラインで高度を稼ぐことができた。ここまで来ると、ロールワリン・カンはさらに大きくなって迫ってくる。しかし、ベースが上がらない。初めての高度ということもあるだろうが、今年のメンバーにはもともと体力を鍛えてほしかった。結局6000mにはわずかに届かなかった。さすがにこの不甲斐なさには苦言を呈するしかなかった。

高所順応を終えてベースに戻り、天気予報の関係で、レスト2日でサミット・プッシュに出ることになった。順応で苦言を呈した私であつたが、彼らのような回復力はない。レスト2日ではベストの状態ではないが、天気にはかなわない。回復もそこそこに出発したが、若いメンバーはさすがに元気そうだった。初日でC1に入り、2日目は6100mにファイナル・キャンプ(C2)を設営した。

この日は花谷と飯田が先行して、登頂ルートの偵察を行なった。最初はリッジ上のラインを選んだが、雪の状態が悪く、支点が構築しにくいコンディションだった。これ

だったら、素直に雪壁をクライミングした方が良さそうだった。4ピッチほど延ばしたところでいったん引き返し、向かって左手にあつた雪壁を明日のルートとすることにして装備をデポ。明日に備えることになった。

10月19日、朝5時半ごろにC2を出発。前日のトレースをたどって壁の取付に向かう。絶好の登頂日和だ。クライミング・システムは、3人パーティが二つ並行して登る形にした。広い壁だったので、このようなシステムが可能になった。思いのほか雪の量が多く、いくら掘ってもアンカーに耐え得るしつかりとした氷が出てこないコ



頂上稜線を登る



登山終了後、BCマネージャーを含めた全隊員で記念撮影

ンディションは想定外だったが、それでもなんとかあの手この手で支点を作り、常にご場所から下降できるかを考えながら上を目指した。こういうコンディションでの支点作りは、経験がモノを言う。今回は、私が作る支点をしっかりと見て覚えてもらうことにした。予定どおりお昼ごろに頂上稜線に抜けた。事前に地形図やGoogle Earthで判断していたとおり、ここから頂上までの稜線は普通に歩いて行ける地形となっていた。頂上は若干狭かったが、13時5分、全員で頂上に立つことができた。

**全員の頑張りとお天が勝因**

昨年と比べて難しい山だったが、支点の構築さえできればいつでも退却ができるという、技術的にはやりやすい山だった。しかし、いざ登り始めると、まだシーズンが早めだったので、氷が深い雪の下に埋まってしまい、支点を作るこ



13時5分、登山メンバー全員がロールワリン・カンに初登頂

とが非常にテクニカルだった。結果としてこの部分は私がすべて引き受けるし、若手メンバーにはそれをしつかり見習ってもらった。また、私以外が6000m以上の高所で宿泊したことがないなど、行ってみなければ分からないことばかりだった。まずメンバー全員がよく頑張ったこと、そして、天候が安定していたことが全員登頂につながった。

### 継続できるシステムの構築へ

帰国してから、メンバーたちは何を思っているのだろうか。昨年のもそうだったが、登頂したこと、喜びよりも、自分の力が通用しなかったことに対する悔しさを抱い

ている者がほとんどではないだろうか。しかし、そのときは落ち込んでいても、これからどのように山と向き合うか、具体的にイメージができるようになっていいると思う。その気付きこそが、この合宿の最大の目的でもある。

私はこのプロジェクトで、ヒマラヤに行くというチャンスや今後のきっかけを提供するだけである。このチャンスから何かを学び、活かすのは参加者次第。これから彼らがどのような道に進もうとも、今回の経験はすべて力となるに違いない。しかし、一人でも多くの

## 新会員証の発行と提携施設についてのお知らせ

昨年、会報10月号で概要をお知らせした「新会員証の発行手続き」および「会員証を提示することにより各種割引を受けられる提携施設」について、具体的にお知らせします。

①新会員証の発行については、会報今号に同封の「会員証発行申請書」に記入していただき、郵便局から郵便振替でお申し込みください。会員証作成、送料などの費用が合計で1000円必要です。なお、お申し込みいただいた月の翌月末までにお届けする予定ですが、申し込みが集中した場合は発行事務に日数を要し、お届けが若干遅れることもあります。

②第1期提携先一覧については、会報今号に同封しましたのでご覧ください。また、日本山岳会ホームページでも閲覧でき、新会員証の裏面にプリントされたQRコードを使用して閲覧することもできます。

なお、現時点ではサービスを受けられる提携先は、地域も数も限られていますが、引き続き提携していただける山小屋の地域を全国的に拡大するとともに、山麓や山中の宿泊施設、交通機関、日帰り入浴施設、博物館・記念館、登山用具店、旅行会社などの新規開拓、増加に努めてまいります。

メンバーに、今回の登山を人生の思い出とせずに、より大きな目標に向かって進んでもらいたい。今後の目標ではあるが、私はヒマラヤ・キャンプという「システム」を構築したいと思っている。私がいなくなっても稼働し続けるようなプロジェクトにしなければ意味がない。そして、もし同じようなプロジェクトを行いたいという組織や個人が現れたら、私は全面的に協力して、これまで蓄積したノウハウや情報を共有したい。全国から同志が立ち上がることを期待している。

## REPORT

東ネパール・ナンガマリⅡ峰(6029m)  
初登頂

## 関西支部東ネパール登山隊2016

## 登山計画の始まり

日本山岳会関西支部は2015年、設立80周年を迎え、記念事業の一つとしてヒマラヤ登山隊を派遣することにした。2005年の70周年のときも「西チベット学術登山隊」を派遣し、パチュムハム(6529m)北稜とギャンゾンカン(6123m)南東壁の初登頂と、河口慧海の「謎の越境ルート」の解明をするなど大きな成果を挙げた。

2013年に入って、ネパール・ヒマラヤ研究の第一人者である大西保会員(70周年記念登山隊長)と打ち合わせを繰り返し、東ネパールの未踏峰ナンガマリⅠ峰(6547m)を目標とした。1912(大正元)年に、青木文教が南西のティプタ・ラ(5095m)を越えてチベット入りしたことも念頭にあった。同年6月に「関西支部設立80周年海外登山PJ」を立ち上げ、月1回の打ち合わせを開始した。14年6月には支部報に「ヒマラヤ

登山隊参加者募集」を行なった。登山計画もⅠ峰の初登頂だけでなく、Ⅱ峰への縦走および青木文教の入域ルートをたどるトレッキング隊の実施を予定していた。

しかし10月下旬、隊長に予定していた大西会員が食道・胃・大腸癌の摘出手術を行ない、14年9月20日、帰らぬ人となった。併せて11月には目標としていたⅠ峰がスイス(現地ではニュージールランドという)隊によって初登頂されてしまった。予期せぬ二つの喪失により受けたショックは大きかったが、右往左往している時間的余裕はないので計画を練り直し、Ⅱ峰の初登頂とⅠ峰への縦走に絞り込んだ。

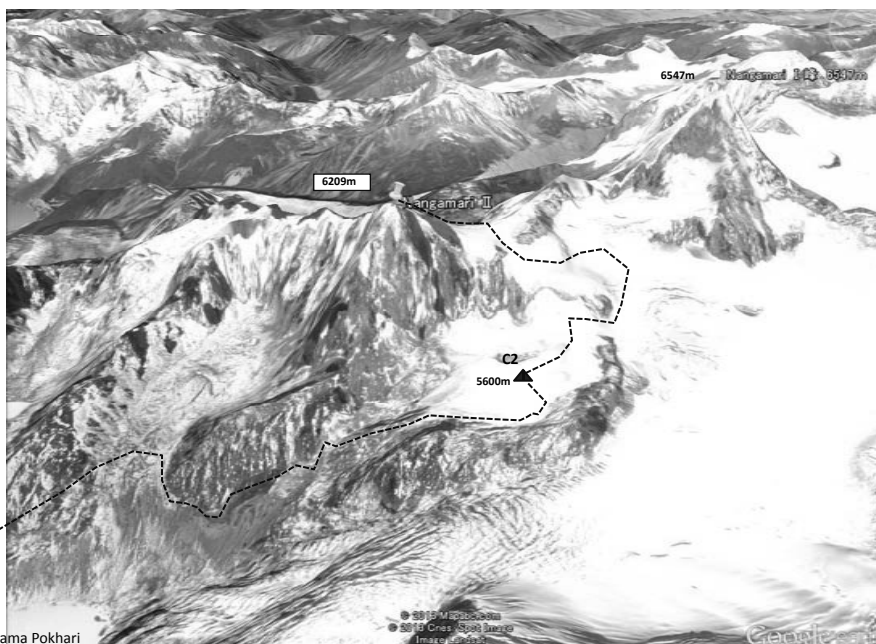
## 「ヒマラヤ登山塾」の開講

今回の登山は日本山岳会の探検的高峰登山の伝承を目的として企画したものであり、15年2月5日までに14回のプロジェクト会議を

開催した。

当初20名いた登山隊参加希望者も、打合せやトレーニング山行を続けるなかで体力・技術・家庭の都合などで参加予定者が減ったのを契機に、第15回からは「ヒマラヤ登山塾」と称して、ヒマラヤ登山の基礎から学び始めることにした。

過去の登山隊の報告書などを通して、ヒマラヤ登山の歴史の認識、高所順応、登山装備、食料および食料計画、高所医学の基礎、登山隊の編成の要諦など、これまでに



登山隊のルート。グーグルアースより

14回の登山隊に参加した際の資料などを準備し、解説した。併せて大西会員の残した資料(5万図、グーグルアース・データなど)を基にキャラバン・ルートや登山ルートなどの検討、装備・食糧の必要



II峰頂上を目前にして。左手後方はナンガマリII峰

トレーニン  
グを8回、7  
月・8月に  
は3回の高  
所順応トレ  
ーニングを  
富士山で行  
なった。

## 登山の実際

カトマン  
ズ到着後は、  
日本から発  
送したテン  
ト、登攀装  
備、高所食な  
どのチェッ  
クと、現地購  
入のうちフ  
イックス・  
ロープ、ガス  
ボンベ、マッ  
トなどの確  
認と、食料と  
登攀装備など  
の購入や梱包  
などであつ  
たという間に  
3日間が過ぎ  
た。タプレ  
ジューンでは  
約80個、2・  
5の隊荷にナ  
ンバーを振り  
、荷物を担  
ぐポーターに  
ナンバー・プ  
レートを持た  
せ、キャンプ  
地到着時

に隊員が状況をチェックすることとした。

グンサまでのキャラバンはおおむね順調であつたが、連日の雨はナンゴ・ラやマルソン・ラの通過のときにナンガマリ峰が遠望できなだけでなく、いつモンスーンが明けるのかと気をもませた。また、グンサからは隊荷の輸送のほとんどをヤクが担うことになったが、最奥の村ヤンマでは雪でヤクが動けないということで停滞となり、焦りがつのり始めた。加えてナンガマ・ポカリの周辺地形が氷河の衰退による削岩で平坦地が少なく、ベースキャンプの位置が予定した湖の上端ではなく、下端のさらに下のカルカに設けざるを得なくなった。そのことにより、C1、C2の位置も下がることとなり、隊員による荷上げにも大きな影響をもたらした。

また、キャラバン途中から体調を崩す隊員も出始め、BC入り後、上部への荷上げや偵察を行なっている10月3日、岩井隊員がC1で、4日にはBCで松仲隊員が体調を崩した。その後、岩井隊員は42度を超える高熱が続き、松仲隊員は浮腫がひどくなったので10月6日、

ヤンマに降ろした。その間も荷上げやルート偵察は継続されていたが、ヤンマ滞在の隊員の体調回復は思わしくなく、立野医師の要請もあつて7日、C1より衛星携帯を通じてヘリコプターのチャーターをエージェントに要請した。8日には重廣がC1よりBCを経てヤンマに下り、2人の体調を確認するとともに、正式にヘリコプターのチャーターを行ない、翌9日、2人をカトマンズに送り出したのちBCに戻った。

ヤンマの長老に聞いたチベット暦では16日までは天気が悪く、17日以降は好天という。10日のインターネットによるラサの天気予報では、13日以降の好天を予測していた。11日C1入りしたが、夜半からの降雪のため翌日は停滞となった。BCを離れる日は21日と決めていたが、これを22日に変更した最終スケジュールを12日に発表した。ところが、14日は晴天にもかかわらず、前日の荷上げの無理がたたった隊員の疲労が激しいため休養となった。

この日、前日にカトマンズからヘリコプターでヤンマに到着した岩井隊員がC1に戻った。15日、全

数量の算出を行なった。16年9月9日の出発までに34回の会合を行ない、ヒマラヤ登山塾は20回を数えた。15年5月から16年6月・8月までに雪上歩行、ユマールینگ、雪崩探索、セルフ・レスキューの

員がC2予定地に到着してキャンプを作った。16日、ナンガマリⅡ峰に向かったが、好天による昇温で雪崩が心配されたため、5880m地点で引き返した。この時点でⅠ峰への縦走をあきらめ、Ⅱ峰の初登頂に絞り、帰りのキャラバン手配のためサダーをBCに下山させた。最後のアタックは24時起床、2時出発、岩壁下6時、コル8時、Ⅱ峰頂上到着11時、15時帰幕という行動予定を隊員に伝えた。

17日、2時10分出発。前日のトレスをたどり岩壁下へ。岩井・森本・竹中隊員を先頭に、フィックスワークをしながら進みコルに出る。森本・岩井隊員が交互にフィックスワークを繰り返し、重廣・竹中隊員はルート指示とルートワーク整備を補充、ほかの隊員がそれに続く。12時過ぎ、森本隊員が頂上稜線に到達。ナイフリッジの細長い頂上のためさらに岩井隊員が10mほど進み、12時37分、全員頂上に集結、記念写真を撮影。昼前から雲に包まれ、頂上からの展望はない。17時35分、全員C2に帰着した。

## 登山を終えて

登山基地のタブレジュンを出発してからベースキャンプまで15日、BCから頂上まで17日という登山であった。この間、登山隊に参加した隊員たちが何を感じ、自身の行動状況を克明に記憶し、その体験を今後にどう活かすのか興味深い。実践の積み重ねこそが、その後の活動を増幅させる唯一の手段であるのは間違いない事実だからである。

(重廣恒夫)

## 日程

9月9日 関空→カトマンズ  
9月13日～14日 カトマンズ→タ



ナンガマリⅢ峰山頂に立つ

タブレジュン(1820m)

9月16日～21日 タブレジュン→

グンサ(3595m)

9月23日～29日 グンサ→BC

(4800m)

10月1日 C1(5050m)建設

10月2日 大岩(5282m)到達

10月3日 上部デポ地(5448

m)到達

10月6日 岩井・松仲隊員がヤン

マ(4200m)に下山

10月9日 2名ヘリコプターにて

カトマンズへ

10月9日～10日 BCにて休養

10月11日 BC→C1

10月12日 C1にて休養

10月13日 C2予定地ヘルート工



C2での記念写真。バックはナンガマリⅢ峰

作と荷上げ。岩井隊員BC復帰

10月14日 C1にて休養

10月15日 C2(5580m)建設

10月16日 5880m地点往復

10月17日 ナンガマリⅡ峰初登頂

10月21日～24日 BC→グンサ

10月25日～11月1日 グンサ→タ

ブレジュン

11月2日～3日 タブレジュン→

カトマンズ

11月7日～8日 カトマンズ→関

空

## メンバー

隊長 重廣恒夫(69歳) 関西支部

登攀リーダー 岩井賢助(27歳)

## 四国支部

食料 加藤芳樹(49歳) 関西支部

装備 黒田記代(63歳) 関西支部

輸送 竹中雅幸(26歳) 関西支部

医療 立野里織(40歳) 関西支部

会計 長瀬美代子(38歳) 四国支部

食料 松仲史朗(64歳) 関西支部

記録 茂木完治(69歳) 関西支部

通信 森本悠介(27歳) 関西支部

会友

(年齢は登頂時)

## REPORT

## 若手メンバーで東稜からマナスル登頂

## 東京農業大学マナスル環境学術登山隊2016

発端は農大山岳部創部90周年にあたる2014年。記念事業として海外登山を行なおうという話を持ち上がり、山岳部監督であった村田OBが隊長となり、若手の高所経験者を作ることを目的に、現役の学生の参加を含めた海外遠征を実施することとなった。

目的の山はムスタグ・アタ峰(7546m)。さながら「夏山合宿inムスタグ・アタ」といったところだろうか。学生3名、OB4名、OG1名の8名で、ノーマル・ルートから全員登頂を果たした。このときのメンバーが主体となり、自然な流れで次なる目標を探すことになった。集まった隊員は6名。まず山とルートを探すにあたり、ヒマラヤを志す者として、自分の身体が高所でのような反応を示すのかを知るといった観点から、8000m峰を登るといったことは外すことができなかった。そして我々の強み、学生時代に培ってきた長期間の山行とそれに耐え得る体力

と精神力を活かせるルートであること。検討した結果、マナスル東稜の長大な稜線こそが、力を大いに発揮できる課題だと判断し、計画に至った。

また、今回は東京農業大学の創立125周年の記念事業に組み込まれたこともあり、短期大学部助教の下嶋聖先生と学生4名からなる学術調査隊も組織し、全11名の隊となった。学術調査隊はマナスル・サーキットおよびマナスルBCにおいて、観光利用の実態と地域社会の構造を調査し、環境や地域社会にインパクトを与えない適正な環境収容力の算出に向けた基礎データの収集をした。登山隊も、2003年のエベレスト・ロッツェ遠征より継続している環境へ配慮した登山活動、具体的には上部キャンプでの大便の荷下げ、BCでの雑排水の濾過などを実践した。目指す東稜は1985年にオーストリア隊が初登、88年にスイス隊が第2登したルートである。4

9000mの取付から顕著なルンゼを詰め、5500mで東稜上に出て、7000m付近からノーマル・ルートのACへ向けてトラバースするラインである。6000m付近に現れる岩稜帯が、技術的な核心部となる。

8月26日に東稜BC(4500m)入り。取付のルンゼはほとんど雪がなく、上部からの落石が頻繁に起こった。岩は硬いものの浮石が多く、神

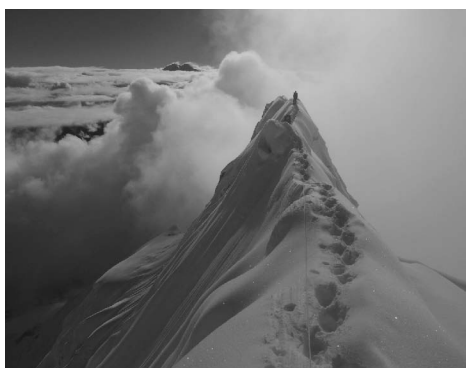
経を遣うポイントであった。主稜線上に出た5450mにC1を設営、岩稜帯直前の6000mにC2を設営した。6000m付近から始まる岩稜帯は両側が切れ落ちたリッジで、岩峰を左右に巻きながら通過した。水平距離にして約300m、前後に現われる雪稜を



6000m付近の技術的核心部となった岩稜帯。左上はピナクルとマナスル山頂(左)

含めると約6000mとなる。この後、尾根は雪原状になり、クレバスや降雪後は雪崩に注意が必要だった。

C3を6750mに設営。7000m付近からプラトールに向けてのトラバースに入るが、思いのほか距離が長く、雪が深くて苦労させられた。計画よりも日数を消費



C2～C3間、6100m付近のナイフリッジを通過する

したが、全員でAC(7400m)に入り、アタック態勢ができた。しかし10月6日のアタックは天候が悪く、7650m付近で撤退を余儀なくされた。10月7日、先日までの疲労度から全員でのアタックはリスクが高いと判断して、緊急時用に用意していた2本の酸素ボンベを使用し、高野・小野寺の2名で頂上へ向かうこととした。13時30分、小野寺、続いて高野がマナスル登頂を果たした。しかし、直後に小野寺が行方不明となってしまう。ヘリコプターでの捜索を行なったが発見できず、達成感も吹き飛び、無念な気持ちが残る結果となった。

今回はアルパイン・スタイルでも



C3の手前、6500m付近の雪原を歩く。行く手には雪煙を上げるビナクルが

なければ、新ルートでもない。記録的な価値は薄いかもしれない。だが、まず登山隊員がいて、そのメンバーの力を最大限に発揮できるルートを運び、信頼できる仲間とすばらしいルートに挑めたことは幸せな時間だった。

無酸素での全員登頂という目的は達成できなかったが、8000m峰のバリエーション・ルートから、シェルパ・レスで登頂できた経験は何ものにも代えがたい。しかし、我々はこの登山から学ばなければならぬことがたくさんある。マナスル登頂と同時に逝った小野寺隊員の志を受け継ぎ、次なるより高い目標へのステップとしなければならぬ。

(高野 優)

## 日程

|                      |            |
|----------------------|------------|
| 8月12日～13日            | 先発隊、羽田     |
| カトマンズ                |            |
| 8月15日～16日            | 本隊、羽田      |
| トマンズ                 |            |
| 8月19日～25日            | カトマンズ      |
| シサハール                | ビムタン       |
| ルキヤ・ラ                | サマ         |
| 8月28日                | サマ         |
| 9月7日                 | C1建設       |
| 9月13日                | C2建設       |
| 9月20日                | C3建設       |
| 10月5日                | AC建設       |
| 10月6日                | 第1次アタック失敗  |
| 10月7日                | 2名で登頂成功するも |
| 滑落事故発生               |            |
| 10月12日               | BC撤収       |
| 10月15日～19日           | サマ         |
| カトマンズ                |            |
| 10月20日～24日           | カトマンズ滞在    |
| 10月25日               | カトマンズ      |
| 田                    | 広州         |
| 羽                    |            |
| メンバー                 |            |
| 隊長 高野 優 (涉外、31歳)     |            |
| 隊員 西出 広平 (輸送・保険、27歳) |            |
| 長谷川 新平 (食料・医療、27歳)   |            |
| 岩附 正樹 (装備・会計、23歳)    |            |
| 小野寺 央峻 (通信・気象、23歳)   |            |
| 関根 孝高 (記録、22歳)       |            |

## 『山岳』第112年の原稿募集

本会の機関誌『山岳』第百十二年(2017年)の発刊は、本年6月下旬を予定しております。原稿の締め切りは3月末となりますが、会員の皆様方からのご投稿をお待ちしております。なお、採否につきましては、恐縮ですが編集委員会に一任させていただきます。

手書き原稿でも結構ですが、できますれば下記宛、メールでのご連絡、ご投稿をお願い申し上げます。

【送り先】〒274-0073船橋市田喜野井2-1-4

節田重節 ☎047-476-1237

✉ j-setsuda@ray.ocn.ne.jp (『山岳』編集委員会)

さんけん通信

## 山研のご利用ありがとうございました

## 閉所作業

北アルプスの紅葉が過ぎると、上高地・山研もいよいよ冬を迎えます。10月29日・30日、山研の閉所作業を行ないました。雨に遭うこともなく作業は無事終了しました。山研の閉所作業は大きく分けて4つに分けられます。

- ①善六沢取水口から山研までの水抜き
- ②建物内外の水抜きと貯水槽の清掃
- ③雪囲い板の取り付け
- ④建物内の清掃

これらの作業でいつも気になることは「不意な事故の発生」です。作業中に転落事故や怪我をしないことを願うのはむろんですが、昨年は上高地内でも熊の出没が多く目撃されているので、善六沢で水抜きをするメンバーは、熊避けスプレーを持参しての作業です。

水抜き作業は、一昨年前までは善六沢から飲料水用とミニ水力用の水を2本のホースで引いていたので作業が大変でしたが、飲料水

## 山研運営委員長 安井康夫

については地元関係者や行政関係者のご協力の下、昨年、水道を引くことができたので、今年の水抜き作業は例年に比べてはかどりました。

## 水道本管の水抜き

しかし、閉所作業はこれで終わりではありません。10月15日、毎年この日に上高地は、大自然の恵みに感謝し祝う「上高地閉山式」が執り行なわれます。閉山式を終えると、翌日から上高地の各施設は建物を閉める作業で皆さん大わらわです。そして17日、右岸水道本管の水抜き作業が行なわれます。建物から山研入口近くまでの水は閉所作業です。に抜いています。山研入口近くから河童橋までの水道管の中にはまだ水が残ったままです。17日の右岸水道本管の水抜きに併せてこの部分も水抜きを行います。水抜きはただ単に抜けばよいというものではなく、水道管に水が残らないように強力なポンプでエアを送ります。この一連作業は専門業者をお願いします

が、最後まで手が抜けません。エア送りが終わってバルブを閉めると、やっと閉所作業の終わりです。シーズン中、多くの会員を迎えてくれた「山研」に感謝です。

## シーズン中の出来事

上高地のシーズンはご存じのよううに半年間だけですが、この間、上高地ではいろいろな行事が催されました。主なものを挙げると、毎年4月27日に開催される「上高地開山式」を皮切りに、6月の70周年ウェストン祭開催、7月19日の「上高地トンネル」開通式、そして8月11日に第1回「山の日」記念全国大会が上高地で行なわれ、皇太子様ご一家も記念式典にお見えになり、上高地を散策されました。また山研では、8月20日に松本消防署の協力を得て消防訓練を行いました。9月になると例年になく長雨が続きましたが、水道のお陰で飲料水が供給できることは、関係者にとってうれしく思います。

ところが、行楽シーズンを前に発生した台風18号が松本地区を襲い、10月5日夜、上高地一帯は幹線道路等の倒木による停電が発生。「復旧に目処がつかない」との情報もあり、山研利用者への対応に

ヤキモキしましたが、電力会社の必死の復旧作業により7日午後には回復、安堵しました。山研は、ミニ水力発電により照明についてはなんとか乗り切ることができましたが、貯水槽から送り出すポンプ作動までは電力供給がでず、飲料水については備蓄用のペットボトルで難をしのぎました。

このように、今シーズンの上高地はいろいろなことがありました。また「山の日」の影響でしょうか、上高地を訪れた観光客や登山者は多かったです。お陰さまで山研も例年になく多くの会員にご利用いただきました。山研運営委員長一同、この場をお借りしてお礼申し上げます。

\*

山研の開所作業は4月22日・23日に行ないます。皆様にお目にかかれることを楽しみにしています。山研でまたお会いしましょう。



強力なポンプでエアを送る

# 東 西 南 北

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

## ウェストン師は笠ヶ岳に登っていない(その2)

木下喜代男

明治27年8月2日、ウェストン一行が3度目にしてようやく登頂できたと思っていた笠ヶ岳が、実は抜戸岳であった。

本会報平成28年3月(850)号でその検証結果を報告したが、案内の猟師たちが抜戸岳へ導いた理由までは、紙面の関係で述べることができなかった。

その後、飛騨地方の歴史研究家の紀要『斐太紀』に詳細を書いたところ、地方紙に大きく取り上げられ、講演まで依頼されて、登山愛好者のみならず一般の方の関心をも集めることになった。

講演会で検証内容を説明し、「猟師たちがなぜ抜戸岳へ導いたのか」について筆者の推論を述べ

たので、以下その内容を書いてみたい。

蒲田集落の人たちの迷信深さを笑った猟師たちも、「阿弥陀如来がおられる頂上へ異教徒を登らせるとはバチがあたる」ということでは、同じ考えであったと思う。その証拠に猟師たちは、稜線に出た時口ウソクを立てて祈っている。これは笠ヶ岳の阿弥陀如来に礼拝し、異教徒を連れてきたことを詫びたのであろう。

この時期の山麓の人々にとつての笠ヶ岳という山は、文政7(1824)年に播隆上人が頂上へ阿弥陀如来像を安置し、同行の人々がブロッケン現象を阿弥陀仏の出現だといつて感涙に咽んだときからまだ70年も経つておらず、依然「聖なる山」であった。

この話は、昭和29(1954)年にネパール・ヒマラヤのマナスル初登頂を目指した日本山岳会の第

2次登山隊が、山麓のサマ集落で「聖山を穢したので村へ仏罰が下った」として妨害に遭い、撤退を余儀なくされた話とよく似ている。

理由は、その前に偵察隊などが山へ入った後、村の僧院が雪崩に襲われてラマ尼3名が死亡、さらに村に天然痘、腸チフスが流行して死者が続出し、おまけに早魃に見舞われて災難が続いているというものであった。

この話はごく最近でもある。平成21(2009)年9月、チベットの未踏峰に登りに行った知人は、山麓の人から「皆が崇めている聖山に登らせるわけにはゆかない」と入山を拒まれたのである。ちょうどこのとき雹が降って農作物が被害を受け、これも登山隊のせいにされたという。

私事ながら平成19(2007)年、チベットの未踏峰に登頂したとき、山麓の人が崇めている山だと聞いていたので最頂部は踏まず、何も残さず下山した。ご存じのとおり、チベットにはカイラスという登山が禁止になっている聖山もある。これは山を崇める東洋と、山を征服する西洋の考え方の相違であり、異教徒の入山に難色を示した当時

の蒲田川沿いの人々を笑うことはできない。

それでも猟師たちが案内を買って出たのは、遠路3度も登りに来ている外国人を拒むのは気の毒だからという優しさからであり、折衷案として阿弥陀如来がおられない、もう一つの頂(猟師たちの遙拝所だったと思われる)の方へお連れすればいいということだったと思う。夏の午後であり、笠ヶ岳方面はちょうどガスに包まれていたかも知れない。

まだ地図がないこのころは、穂高岳がそうであったようにこの山域一帯が同じ呼称「笠ヶ岳」だったことも考えられる。遊びで山に登るといふ近代登山のことがまだよく分かっていなかった当時の人々には、必ず主峰を踏まなければならぬということが理解できなかったのではないだろうか。小島鳥水は著書の中で、抜戸岳のことを笠の形をしているとして「小笠岳」と命名しているが、ウェストンは「小笠岳」に登ったのだ。

講演会では、「師は初めから仏のおられる南峰(笠ヶ岳)は無理なことを承知しており、北峰(抜戸岳)で満足したのではなからうか」

というご意見もいただいた。

案内の報酬のことも考えられるが、猟師や樵たちが登山者の案内で決まった報酬を得るようになったのは、大正時代に入ってからである。

明治の初め、東北から北海道を旅した英国人女性イザベラ・バードの著書『日本奥地紀行』にもあるように、この当時、旅行者に擦れていない農山村の人たちはまだ報酬というものに淡泊であり、特に外国人からお金を受け取って自分たちを貶めるわけにはいかないという気分を持った人が多かったようだ。この純朴な猟師たちも結果的には受け取ったかもしれないが、彼らの同行申し出が報酬目的であったとは言いがたい。

結果、ウェストン師には悪いことをしたが、明治期に日本人に先駆けて多くの山に登り、鳳凰山の地蔵仏、奥穂高岳・南稜、槍ヶ岳・東稜などの初登攀をしている師の登山歴の輝かしさは、この一山のことではなんら曇ることはないだろう。

## 活動報告

日本山岳会の  
各委員会、同好会の  
活動報告です。

### 資料映像委員会

#### 「第20回全国山岳博物館等連絡会議」開催

本年は第20回の節目を迎え、2016年11月26日(土)に開催された。会場は参加館である「東京都写真美術館」のご厚意により、リニューアルオープン成った同館1Fのスタジオを会場として13～17時の間、熱心な発表とアドバイス、質疑応答等が交わされた。

参加した館は10館(12名参加)で、本会からは理事・委員10名が参加して、各館の現状と問題意識、将来への展望を含めて意義ある討議を展開した。この会議が山岳文化の向上の一端に寄与し、その傳承に努めているのを実感した。参加した博物館などの主な内容を紹介する。(敬称略)

【東京都写真美術館】 関次和子  
約2年にわたるリニューアル工

事を経て、この9月に再オープンとなった。フロアリング化、LED照明採用、可動壁の拡大、エントランスの拡大および新規機器採用等の整備。

新しいシンボルマークとロゴタイプを制作、「トップミュージアム」の愛称決定

【(公財) 植村記念財団・植村冒険館】 内藤智子

デナリで植村直己が遭難し、遭品の装備などを明大の後輩が回収して持ち帰ったものなどを展示。地域の子どもにも自由研究ほかの対象として興味を向けるような企画を実施している。

【四季の杜おしの公園 岡田紅陽写真美術館・小池邦夫絵手紙美術館】 大野絵美子 石井有妃

岡田紅陽は富士山写真の第一人者、小池邦夫は絵手紙の創始者で、両館が同じ建物にある。

各種のフォトコンテスト、絵手

紙公募展等をそれぞれ展示。フィルムでのデジタル化を討議。

【谷川岳山岳資料館】 門平敏男

開館期間は年間7ヶ月間(5月1日～11月23日)と短く、運営はなかなか厳しい。企画展として「回想の山・谷川岳写真展」特別展「日本近代登山のパイオニア 木暮理太郎展」「清水越往還の道筋」

【松本市山と自然博物館】 澤柳秀利

「山の日」記念として、「まつもとの名山I」美ヶ原の自然と歴史」を開催、江戸時代すでに「うつくしが原」の名が絵図にある。御嶽信仰の山であり、石造り神像は御嶽山を向いて立つ。

【田淵行男記念館】 斉藤昇三

NHKのテレビで田淵行男について3回取り上げられ、来館者が多かった。「山の日」記念として8月11日に「第5回田淵行男写真公募展」(3年ごと開催)の授賞式および講演会を実施。

【市立大町山岳博物館】 関 悟志

鹿島槍ヶ岳・カクネ里雪溪の水体調査を2年かけて実施(大町市、立山カルデラ博物館、信州大、長野県などによる調査団)した。水体の流動を確認、関係者により論文

発表の予定。

第17回「ライチョウ会議長野大会を開催、国の主導による絶滅防止の取り組みに協力。」

【黒部市歴史民俗資料館】（うなぎ友学館） 八尾隆夫

宇奈月には江戸時代架橋の刎橋として有名な旧愛本橋があった。その2分の1に復元したものを常設展示している。企画展は「トロツコとめぐる90年の旅」で登山家、電源開発などを紹介。

【立山カルデラ砂防博物館】 飯田肇 是松慧美

最近アジアからの来館者が多く、語学の対応に留学生、多言語対応タブレットなどを採用。御嶽山の

噴火による登山災害に鑑み、年間を通じて「火山と防災」関係について展示。

企画展として「立山の文化財」を取り上げ、そのうち地形、動物関係を紹介した。

【富山県 立山博物館】 吉井亮一  
今年は立山信仰に関する展示を数回開催。「閻魔の眼光」「地獄の閃光」ほか「立山曼荼羅の絵解き解説」なども行なった。来年は「姥尊」(姥尊はかみかみ)を企画している。立山室堂の解体修理(1992〜94年)についても、当時の関係者として貴重な話をいただいた。(小原茂延)

## 支部



だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとりポートします。

### 越後支部

越後支部創立70周年記念式典と祝賀晩餐会を開催

越後支部創立は昭和21年12月5

日で、平成28年12月10日(土)に70周年記念式典と祝賀晩餐会を、新潟市・東映ホテルで盛大に開催した。毎年12月第2土曜日が支部恒例の

晩餐会であり、今回は創立70周年記念行事として開催し、82名の支部会員が参加した。

13:00より後藤正弘事務局長の会式宣言。最初に支部会員物故者(茨木弘、飯田武夫両氏)に黙祷を捧げ、次いで新しく永年会員になった支部会員4名(小林忠雄、渡辺竜吉、豊島洋一、田中栄弘の各氏)の紹介があった。遠藤家之進正和支部長は開会挨拶で、「今年は越後支部創立70周年であり、4月に全国支部懇談会を弥彦で開催、記念行事の『日本三百名山越後支部執筆21座踏破』を3月27日から11月3日の間に登頂を成し遂げた。また、山の日記念行事で7月25日に高頭祭と県山協たいまつ登山祭。非常にハードな行事日程が続いたが、皆様のお陰で無事目的達成することができた。」と述べられた。  
続いて新潟県山岳協会の阿部信一会長から、「県山協と越後支部は、長い間一体的な交流関係があり、今年の越後支部の活動は目を見張るものがあった。今後も継続的に協力をお願いしたい。」と祝辞をいただいた。本部の小林政志会長から、越後支部創立70周年記念に対する祝電も披露された。

第1部記念式典は、桐生恒治副

支部長の司会進行で、70周年記念事業の目玉企画である「日本三百名山越後支部執筆21座踏破計画」の報告会を行なった。山崎幸和実行委員長が挨拶で、「本計画は、50年前の創立20周年記念県境全踏査計画以上の困難が予想されたが、噴火警戒規制で中止の焼山を除き、20座が予定どおりの期日で無事登頂できた。県境踏査の実働人員は60名ほどだったが、今回の延べ参加人数が200名で大成功といえる。これからスライド上映されるが、表題の『越後の鈍と根』とは、50年前の県境縦走に対し故深田久弥が越後支部の愚直さを表現した言葉である。」と説明された。

登山報告は各リーダーが登頂順に行なった。3月27日浅草岳(桐生恒治)、4月24日三王子岳(高橋正英)、5月15日金北山(藤井与嗣明)、5月22日守門岳(井口光利)、5月29日米山(後藤正弘)、6月5日粟ヶ岳(遠藤俊二)、6月19日巻機山(宮崎幸司)、6月25日佐武流山(佐藤レイ子)、7月2日火打山(七澤恭四郎)、7月3日妙高山(七澤恭四郎)、7月10日杵差岳(石山政雄)、7月17日焼山(中止、靄本

修一)、7月25日苗場山(小山一夫)、8月21日平ヶ岳(櫻井昭吉)、8月28日越後駒ヶ岳(成海修)、9月11日八海山(吉田理一)、9月26日中ノ岳(和田守)、10月2日鳥甲山(宮崎幸司)、10月13日雨飾山(立入清)、10月22日青海黒姫山(後藤正弘)、11月3日御神楽岳(阿部信一)、の報告がされた。

支部会員参加延べ人数は200名。多登頂者ベスト3は、男性の部で1位遠藤俊一(16座)、2位石山政雄(12座)、3位田邊信行(9座)。女性の部で1位根津洋子(10座)と滝沢信子(10座)、3位井口礼子(8座)。遠藤支部長より記念品



創立70周年記念式典参加者

の贈呈が行なわれた。橋本正巳顧問より21座踏破記念事業を終えての挨拶と、支部会友・節田重節日本山岳会前副会長から越後支部の21座登山の取り組みに対しコメントをいただき、15:00報告会を終えた。

第2部の晩餐会開宴前に、越後支部会員の褒章・表彰者の紹介があった。杉本敏会員(会員番号14521)の藍綬褒章受章と遠藤家之進正和会員(会員番号8275)の環境大臣表彰は、いずれも長年尽力された自然保護に対する功績が認められたものである。両氏が荣誉に輝いたことは、越後支部としても大変光栄なる慶事である。

乾杯の音頭は遠く秋田県から参加の小林収会員から取っていた。き、にぎやかな祝賀懇親会となった。1年前に「21座登山を成功させておいしい酒を飲もう!」と約束、登山計画が無事成功裏に終了し、山談義も最高潮に盛り上がり、時間を忘れてしまう。中締めを佐藤レイ子副支部長の万歳三唱で、記念式典を盛会裏に終了することができた。

(桐生恒治)

## 茨城支部

### 「山の日」記念・筑波山交流ハイキングの実施

9月11日に、1ヶ月遅れの初の国民の祝日「山の日」を記念しての筑波山交流ハイキングが、茨城県山岳連盟および茨城県勤労者山岳連盟と我が日本山岳会茨城支部の山岳3団体合同の実行委員会の下に実施された。

当日は秋晴れのハイキング日和となり、県内外よりおよそ200人を超す参加者を数えた。午前8時半よりオプショナル行動としての筑波山清掃登山が、30人余りの希望参加者で筑波山神社前から山頂へ向け開始された。

午前11時より正午まで、山頂中腹の御幸ヶ原において記念式典が開催された。まず主催者代表で実行委員長の高老沢氏(県山岳連盟副会長)の開会の挨拶に次いで県生活環境部課長の玉川氏、つくば市副市長の岡田氏、さらに筑波山神社宮司の岩佐氏らからの心温まる祝辞と激励をいただいた。

これらご挨拶の後に女性20人による「つくば踊り」が演じられ盛り上がった。続いて無形文化財・筑



筑波山交流ハイキングのプログラム

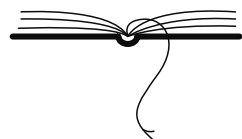
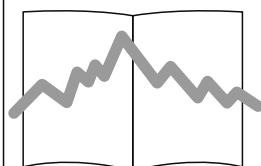
波山ガマの油売り。口上第20代名人の永井兵助氏の口上に参加者より大きな拍手が送られた。

昼食の後、参加者は自然観察コースおよび展望満喫コースに分かれ、山岳3団体より選出された解説者により分かりやすい説明を受けて、初秋の筑波山を散策して午後2時に解散となった。

今回の交流ハイキングが、来年よりの8月11日の国民の祝日「山の日」に、山に感謝し登山をエンジョイする、良きライフサイクルを習得する契機になっていただければ幸いである。

(浅野勝巳)

## 図書紹介



### 二人者—Die Beiden—

田辺 寿著



2016年11月  
文芸社刊  
四六判 124頁  
1000円＋税

タイトルは慶応義塾大学体育会  
山岳部『登高行』第5号（大正13年  
発行）に掲載された「二人者—Die  
Beiden—」に拠っています。

ここでは、片や死の危険にもか  
かわらず困難な山を目指す者、片  
や市井において平穏な生活を望む  
者、という対照が書かれています。  
慶応の山岳部員ならばこれを読  
み、仲間と話題にするものです。

田辺さんは、ヒマルチュリ初登  
頂のとき、どうしても越えられな  
い氷の壁を前にして、命をとられ  
ても登らせてくれ、と神に祈りま  
した。

エベレスト隊に参加できるかど  
うかのときに、「世界一のものに  
爪がたてられるのは山登りだけ  
です。だから私はどうしてもエベ  
レストへ行きたい」と言っています。  
Die Beidenの前者になるには、  
命を懸けた山登りをするのだと  
思っていたのです。

しかし、「仕事人生を振り返る  
と、未踏の地への挑戦、その連続  
であった」と思い至ります。ヒマ  
ラヤで、百貨店業界で、未踏の頂を  
目指し続けた田辺さんは、前者で  
あり続けたのです。

田辺さんは期待されて、ヒマラ  
ヤを、そして大きな仕事を次々に  
依頼されることになります。

日本山岳会のヒマルチュリ、慶  
応義塾のヒマルチュリ、エベレス  
ト南西壁偵察隊、そして沖縄三越  
の創業、ダイエーへの転職、ブラ  
ンタン・ジャポンの創業、ダイエ

## 図書受入報告(2016年11~12月)

| 著 者                                                            | 書 名                                                                                                | 頁/サイズ                  | 発 行 者                                 | 発行年          | 寄贈/購入別           |
|----------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------|---------------------------------------|--------------|------------------|
| 田辺寿                                                            | 二人者: Die Beiden                                                                                    | 123p/20cm              | 文芸社                                   | 2016         | 著者寄贈             |
| 日本山岳会信濃支部 (編)                                                  | ハトニーヴェイルからの風・続巻・ウェストン祭記念講演集                                                                        | 255p/19cm              | 日本山岳会信濃支部                             | 2016         | 発行者寄贈            |
| 神島仁誓・石澤好文 (編)                                                  | 10周年記念誌: 日本山岳会栃木支部設立10周年記念誌                                                                        | 84p/30cm               | 日本山岳会栃木支部                             | 2016         | 発行者寄贈            |
| 日本山岳文化学会 (編)                                                   | 山岳文化につくした人々 (山岳文化叢書 No.8)                                                                          | 240p/21cm              | 日本山岳文化学会                              | 2016         | 発行者寄贈            |
| TJAR実行委員会 (編)                                                  | TJAR2016 大会報告書                                                                                     | /30cm                  | TJAR実行委員会                             | 2016         | 発行者寄贈            |
| 若林忠男 (編)                                                       | 聳嶺: 創立10周年記念号 (新世紀第9号)                                                                             | 197p/26cm              | 一等三角点研究会                              | 2016         | 出版社寄贈            |
| 大槻雅弘 (編)                                                       | 一等三角点百もんどろ                                                                                         | 98p/26cm               | 一等三角点研究会                              | 2016         | 発行者寄贈            |
| 50周年記念誌編集部 (編)                                                 | すごい!山波: 杉並勤労者山岳会50周年記念誌                                                                            | 117p/30cm              | 杉並勤労者山岳会                              | 2016         | 発行者寄贈            |
| 天草山岳会 (編)                                                      | 観海アルプス (No.3): 天草山岳会30周年記念誌                                                                        | 165p/30cm              | 天草山岳会                                 | 2016         | 発行者寄贈            |
| 山本正嘉                                                           | 登山の運動生理学とトレーニング学                                                                                   | 714p/22cm              | 東京新聞                                  | 2016         | 出版社寄贈            |
| タカザワケンジ・柴田尚子 (編)                                               | 東京都写真美術館総合開館20周年史                                                                                  | 534p/26cm              | 東京都写真美術館                              | 2016         | 発行者寄贈            |
| 東京農業大学山岳会 (編)                                                  | 東京農業大学創立125周年 マナスル環境学術登山隊2016                                                                      | 18p/30cm               | 東京農業大学山岳会                             | 2016         | 発行者寄贈            |
| 同志社大学山岳会                                                       | 山 その大いなる旅 II: 同志社大山岳部・創部90周年記念誌                                                                    | 243p/30cm              | 同志社大学山岳会                              | 2016         | 発行者寄贈            |
| 廣川健太郎 (編)                                                      | アイスクライミング (新版・全国版)                                                                                 | 303p/21cm              | 白山書房                                  | 2016         | 出版社寄贈            |
| 猪熊隆之                                                           | 山の天気になまされるな! (ヤマケイ新書 YS031)                                                                        | 237p/17cm              | 山と溪谷社                                 | 2016         | 出版社寄贈            |
| 小泉武栄                                                           | 「山の不思議」発見! (ヤマケイ新書 YS033)                                                                          | 221p/17cm              | 山と溪谷社                                 | 2016         | 出版社寄贈            |
| 澤田実                                                            | 体験的登山技術論 (ヤマケイ新書 YS034)                                                                            | 253p/17cm              | 山と溪谷社                                 | 2016         | 出版社寄贈            |
| 羽根田治                                                           | ドキュメント 単独行遭難 (ヤマケイ文庫)                                                                              | 254p/15cm              | 山と溪谷社                                 | 2016         | 出版社寄贈            |
| 大野崇                                                            | モンブラン山群 II Monochrome 大野崇写真集                                                                       | 80p/29cm               | 山と溪谷社                                 | 2016         | 出版社寄贈            |
| 佐伯邦夫                                                           | とやま 山と人                                                                                            | 210p/19cm              | 北日本新聞社                                | 2016         | 出版社寄贈            |
| China-Japan Joint<br>Friendship Expedition<br>Ed Douglas (ed.) | NAIMONA'NYI 1985 :<br>China-Japan Joint Friendship Expedition<br>The Alpine Journal 2016 (Vol.120) | 223p/27cm<br>457p/23cm | Mainichi Newspaper<br>The Alpine Club | 1986<br>2016 | 平林克敏氏寄贈<br>発行者寄贈 |

1 ホークス社長就任、マルコー管財人就任、と続きました。

3 度のヒマラヤ遠征は勤務先を長期にわたり休まなければなりませんでした。その困難を乗り越えることができたのも、田辺さんの人徳と人脈のお陰でしょう。それに、ヒマラヤ未踏峰への遠征はオリンピックと同じ国家的事業でもあったのです。

本書はそんな田辺さんの幸せな半生を綴ったものです。

15ヶ所の見開き2ページにわたるスケッチが、本文の下に薄墨で描かれているのも滋味を加えています。

組織を離れてからの田辺さんは、両膝の人工関節という不自由を抱えながら、山にできる限り近づいてのスケッチやエッセーにと情熱は涵めることがあります。

Die Beidenの後者となって、幸せな老後を送っているという理解してもよいのですが、年齢・身体能力に応じて全力で生きるということは、最後まで前者であり続けるということになるでしょう。

人生の途中で前者から後者になるものでもなく、同一人物の表裏であり、同時に前者であり後者

なのです。

この冬、田辺さんは世界の5大陸最高峰のスケッチを完成させるために、アコンカグアを描きに南米へ行くことになっています。

3年後の2019年、88歳にはスケッチとエッセー集の出版、山のスケッチ展開催、さらには生前葬まで予定してハリキつています。

本書には奥さんマリ子さん以前に1人、マリ子さんが亡くなってから1人の女性が登場します。これからも新しい女性に巡り会うのではないかと予感されます。

(佐藤文昭)



## 平成28年度第8回(12月度)理事会 議事録

日時 平成28年12月14日(水)19時00分～21時15分

場所 集会室

【出席者】小林会長、吉川・大久保・

山田各副会長、佐藤常務理

事、勝山・野口・大槻・落

合・山賀・直江・谷内各理

事、重廣各監事

【欠席者】神長常務理事・中山・星

各理事、平井監事

【オブザーバー】節田会報編集人

### 【協議事項】

1・今後の業務予定について

今後の以下の業務予定について協議した。(佐藤)

・理事会、常務理事会の日程変更

・支部長会議の開催時期等

2・次期執行部の課題について

次期執行部における重点課題について協議した。(小林)

3・次期執行部組織のポイントについて

次期執行部組織の運営におけるポイントについて協議した。(小林)

4・秩父宮記念山岳賞の発表時期と発表方法について

「秩父宮記念山岳賞実施規程」における発表時期とその方法について協議した。(大久保)

5・会長表彰の取り扱いについて

会長特別表彰以外の会長表彰制度の取り扱いについて協議した。(佐藤)

【報告事項】

1・11月受付分の入会希望者9名、

準会員入会希望者9名について承認したとの報告があった。(小林)

2・寄付金9件について報告があった。(吉川)

3・平成28年度決算見込みと平成29年度予算見込みについて報告があった。(吉川)

4・委員会規程の見直しとその取りまとめ結果について報告があった。(小林)

5・支部長会議の開催状況について報告があった。(佐藤)

6・晩餐会の開催状況について報告があった。(佐藤)

7・会員より平成29年度年次総会において社員提案権行使の申し出があった。(佐藤)

8・110周年記念時計販売の結果について報告があった。(佐藤)

9・栃木支部創立10周年記念式典への出席について報告があった。(小林)

あった。(吉川)

4・委員会規程の見直しとその取りまとめ結果について報告があった。(小林)

5・支部長会議の開催状況について報告があった。(佐藤)

6・晩餐会の開催状況について報告があった。(佐藤)

7・会員より平成29年度年次総会において社員提案権行使の申し出があった。(佐藤)

8・110周年記念時計販売の結果について報告があった。(佐藤)

9・栃木支部創立10周年記念式典への出席について報告があった。(小林)

10・ラジオニッポンより会長へ番組出演の依頼があり、受諾したとの報告があった。(小林)

11・北日本新聞社開発センターからの資料貸出申請について報告があった。(神長)

12・国立登山研修所からの利用予約方法の案内について報告があった。(佐藤)

13・平成29年度事業計画・予算の提出依頼を12月7日に発信したとの報告があった。(佐藤・吉川)

14・山行委員会主催海外登山を当初予定であった6月中旬実施から

9月実施に変更するとの報告があった。(勝山)  
15・「山」12月号の発行予定について報告があった。(節田)

### 【連絡事項】

- 1・日山協平成29年新春懇談会  
1月14日(土)13時～15時 アルカデ  
イア市ヶ谷富士の間
- 2・都岳連新春の集い 1月28日  
(土)17時～ ホテルJALシティ田町
- 3・4支部(千葉・茨城・栃木・群馬)懇談会 2月18日(土)～19日(日)  
妙義グリーンホテル
- 4・日本山岳遺産サミット 2月  
25日(土)13時～ 神保町三井ビル23  
F インプレスグループ セミナ  
ルーム

### 【今後の予定】

- 1・次期理事会等  
1月度常務理事会 1月12日(木)18  
時30分 集會室
- 2月度常務理事会 2月1日(木)18  
時30分 集會室
- 2月度理事会 2月8日(木)19時00  
分 集會室
- 2・事業計画・予算等  
・平成29年1月16日(月) 平成29年  
度事業計画・予算(提出期限)

・平成29年1月25日(木) 平成28年  
度事業報告・会計報告(提出依頼)

## ルイム目誌 12月

- |     |                                |
|-----|--------------------------------|
| 1日  | 総務委員会 YOUTH CLUB               |
| 2日  | 総務委員会                          |
| 5日  | 総務委員会 高尾の森づくりの会                |
| 6日  | 常務理事会                          |
| 7日  | 図書委員会 山行委員会                    |
| 8日  | フォトクラブ 山岳地理クラブ 九五会             |
| 12日 | スキークラブ スケッチクラブ 平日クラブ           |
| 13日 | 山岳研究所運営委員会 支部事業委員会 デジタルメディア委員会 |
| 14日 | 理事会 自然保護委員会 休山会 山想倶楽部          |
| 15日 | 科学委員会 YOUTH CLUB みちのり山の会       |
| 16日 | 自然保護委員会 YOUTH CLUB SUN燦会       |
| 17日 | 山の自然学研究会                       |
| 19日 | 資料映像委員会 YOUTH CLUB             |
| 20日 | 麗山会 スキークラブ                     |
| 21日 | 青年部 三水会 つくも会                   |

- |     |                                  |
|-----|----------------------------------|
| 22日 | 緑爽会 フォトクラブ 二火会 01会 山遊会           |
| 26日 | 公益法人運営委員会 YOUTH CLUB 12月来室者 437名 |

### 会員異動

#### 物故

- |              |          |
|--------------|----------|
| 小林俊樹 (5776)  | 16・11・27 |
| 斎藤郷太郎 (6733) | 16・12・23 |
| 松本康司 (6838)  | 16・12・7  |
| 佐藤清衛 (9307)  | 16・12・15 |
| 佐藤誠二 (10643) | 16・12・14 |

#### 退会

- |              |     |
|--------------|-----|
| 浦 宏至 (13380) | 神奈川 |
| 島田靖子 (14458) | 北海道 |
| 池田浩伸 (15197) | 福岡  |

# I N F O R M A T I O N

## インフォメーション



### ◆フォーラム——登山を楽しむ科学(Ⅹ)

- |    |                          |
|----|--------------------------|
| 日時 | 3月11日(土)13～17時(受付12時30分) |
| 場所 | 立正大学品川キャンパス11号館1151教室    |

#### 演題

- ①「修験道と霊山・霊場」日本山岳修験学会会員 松本敏夫氏
- ②「シカとオオカミが作る生態系——狩猟者はオオカミの代役となり得るか」立正大学地球環境科学部教授 須田知樹氏

③「山のトイレ改善」特定非営利活動法人日本トイレ研究所理事 上 幸雄氏

定員 先着300名(受講票は送付しません。定員オーバーの場合のみ連絡します。)

費用 500円(資料代)

申込み 米倉久邦まで。Eメール

([kagaku@jac.or.jp](mailto:kagaku@jac.or.jp))または、

ハガキ(〒102-0075

東京都千代田区三番町7-6

1303)で

\*立正大学品川キャンパスへのアクセスは(<http://www.ris.ac.jp/access/shinagawa/index.html>)を参照。

「山手通り口」をご利用下さい。

## ◆乗鞍岳雪山登山

山行委員会

天候も和らぐ早春の乗鞍岳に乗鞍スノーリゾートより位ヶ原を経て剣ヶ峰を目指します。休暇村乗鞍高原よりリフトを3本乗継いでスキー場トップに至り、肩の小屋まで絶景を眺めながらスノートレックを楽しみます。肩の小屋からはアイゼン・ピッケルの世界で、急斜面を登り剣ヶ峰を目指します。(歩程8時間半)

日程 3月14日(火)〜15日(水)

集合 14日16時半までに休暇村乗鞍高原へ

行程 15日休暇村―肩の小屋―剣ヶ峰―肩の小屋―休暇村

解散 15日18時ごろ 休暇村乗鞍

高原

参加費 1万5000円(1泊分)

募集人数 12名

申込み 2月10日までに菊池武昭

へ [TEL 090-631917602](tel:090-631917602)

[sanko@jac.or.jp](mailto:sanko@jac.or.jp)

参加者には詳細案内いたします。

## ◆四国八十八ヶ所歩き遍路① 順打ち1国徳島参り 山行委員会

四国八十八ヶ所1200kmを春秋4回の区切り打ち(2年間で歩きます。初回は徳島県(発心の道場)の1番札所・霊山寺から23番・薬王寺まで順打ちします。歩き遍路の経験豊富な四国八十八ヶ所遍路大使が遍路・巡拝・服装等の作法はお教えます。遍路用品は1番札所での購入もできます。

日程 3月25日(土)〜4月2日(日)

8泊9日

集合 25日(土)JR徳島駅改札口7

時。24日(金)夜行バスで到着あるいは前日徳島泊。

行程 25日1番・霊山寺―6番・

安楽寺(泊) 26日―11番・藤

井寺(泊) 27日―12番・焼山

寺(泊) 28日―17番・井戸寺

(泊) 29日―19番・立江寺

(泊) 30日―22番・平等寺

(泊) 31日―23番・薬王寺

(泊) 4月1日―鯖大師―海

部(泊) 2日―甲浦(解散)

歩程 1日20〜30km(健脚向き)

費用 参加費1万円(通信費、写真

代等)、1日1万円(宿泊代は

その都度精算、賽銭、納経、昼

食代)、傷害保険は各自お掛

けください。遍路用品は約2

万円。別途往復交通費。

定員 8名(先着順)

申込み 3月10日(金)までに数見

直へ

[TEL 090-7204-4668](tel:090-7204-4668)

[sanko@jac.or.jp](mailto:sanko@jac.or.jp)

## 訂正

●会報12月号(859号)12ページ

「支部だより(静岡支部)」本文中、

「井川村の資源として村内2万8

000町歩」は「4万数千町歩」の

誤り、大倉喜八郎が買った面

積「2600町歩」は「2万6000

0町歩」の誤りでした。お詫びして

訂正いたします。

## ◆編集後記◆

●先月は1泊2日で、千葉支部の忘年山行に初めて参加しました。

房総の山は最高峰の愛宕山でも408mですから、正直ナメていました。ところが、2日目の群界尾

根(かつての安房と上総の国境縦走は地形が複雑で、稜線が分岐するたびにしばしば立ち往生です。

リーダーが地図やGPSと首つ引きで先導してくれなければ、とても歩けるものではありません。

●大学の山岳部時代から、道のな

い山やヤブこぎの山にルートを見

つけるのが得意でしたが、考えて

みれば、山は常にアルプスや中級

山岳ばかりでした。見通しが良く、

地形がはっきりしているから、地

図読みも楽だったのです。遅まき

ながら、GPSの使い方を勉強し

ようと思っています。(節田重節)

日本山岳会会報 山 860号

2017年(平成29年)1月20日発行  
発行所 公益社団法人日本山岳会  
〒102-0081  
東京都千代田区四番町5-4  
サンビューハイツ四番町  
TEL 東京(03)3261-4433  
FAX 東京(03)3261-4441  
発行者 日本山岳会会長 小林政志  
編集人 節田重節  
Eメール: [jac-kaiho@jac.or.jp](mailto:jac-kaiho@jac.or.jp)  
印刷 株式会社 双陽社